

## RR-18「社会的ひきこもりの回復過程の考察及びロールモデルの作成」

課題提案者：盛岡市市民部男女共同参画青少年課

研究代表者：社会福祉学部 川乗賀也

研究チーム員：菅原由紀、佐々木繭子（盛岡市市民部男女共同参画青少年課）

### <要 旨>

本取組みでは、ひきこもり経験者および経験者の家族に対して、ひきこもり前から社会への再参加の過程をインタビューし、それぞれの経験をひきこもりロールモデルとして冊子にまとめた。ひきこもりは病気ではなく状態を表す現象概念であるため支援につながらないまま長期化する傾向がある。作成した冊子を配布することにより、ひきこもりへの理解が深まり早期相談のための啓発ツールとしての役割を期待したい。

### 1 研究の概要（背景・目的等）

現代、日本ではひきこもりに対する社会的関心が集まっている。出現率は地域により報告が異なるが、ひきこもりに対しては内閣府や厚生労働省の施策等により支援の整備が進められてきた。たとえば、2009年に成立した「子ども・若者育成支援推進法」によって地域での支援体制の構築が求められ、2010年に出された「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」により、その地域での支援を担う機関として、医療機関、保健機関、福祉機関、NPOなどの民間組織が位置づけられている。ひきこもりは「様々な原因の結果として社会参加を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念」と定義され、特定の疾病状態や診断を示すものではない。したがって、個人のニーズに合わせた柔軟な支援が必要である。本調査では、ひきこもりから回復した元当事者8名、保護者4名からインタビューをおこない、回復過程を参考にロールモデルとして早期の相談を啓発するための冊子を作成することを目的とした。

### 2 研究の内容（方法・経過等）

平成28年1月と3月に盛岡市内2地域の全民生委員19名（担当5143世帯）より、担当地区で狭義のひきこもりに該当する方がいるか聴き取り調査をした。そして該当者の人数から盛岡市の全世帯133,084世帯に換算しひきこもりの人数を推計した。

また、平成28年9～11月にひきこもりの支援経験のあるNPO法人や障害福祉サービス事業所に社会復帰した元当事者の紹介を依頼し、ひきこもりの開始から社会との再接続の過程についてインタビューをおこなった。

### 3 これまで得られた研究の成果

民生委員に対する聞き取り調査では12名が担当地区にひきこもりがいると回答し、その人数は19名であった。また多くの民生委員がひきこもりの存在を把握しても、民生委員としてどのように介入していったらいいのか分からないという悩みが伺えた。また今回の調査において

ひきこもりの出現率は0.37%であったことから、狭義のひきこもりがいる世帯を492世帯であると推計した。

次にひきこもり支援経験のあるNPO法人と障害福祉サービス事業所より元ひきこもり当事者8名と保護者4名の紹介をうけた。その結果、全員が数年に及ぶ長期のひきこもりを経験していた。また8名中6名に学校在学中に不登校が見られた。さらに6名はひきこもりの過程で精神科医療機関を受診し、そのうち発達障害の診断を受けたものは4名であった。

次ページにひきこもり経験者の2事例を示す。

### 4 今後の具体的な展開

27年度のひきこもりの実態調査、及び28年度の元当事者を対象としたインタビューより不登校とひきこもりの連続性が考えられた。

今後は県内の高校に協力を依頼し、高校生および保護者に対して本冊子を用いてひきこもりに対する啓発をおこないたい。

さらに不登校については卒業などで学籍を失えば、支援が難しくなることを踏まえ、県内の養護教諭を対象とした不登校とひきこもりについての研修をおこないたいと考える。

\*作成した冊子は「ひきこもっているあなたへ 先輩からのメッセージ」として盛岡市のホームページからもダウンロードできる。

<http://www.city.morioka.iwate.jp/kurashi/shiminkatsudo/seishonen/1019323.html>

### 5 その他（参考文献・謝辞等）

本冊子を作成するにあたり、ご協力いただきました元当事者、保護者の皆様、また関係する機関の皆様に感謝申し上げます。

## 事例1：聴覚障害からひきこもりに

### 成績がよくスポーツ好き（小・中学校）

友達は多くはないがけっこういた。小学校では成績上位、中学校では中の上くらい。部活は小学校から続けていた野球部に入った。

### 成績は伸び悩んだが大学進学（高校～大学～就職）

小中学校で成績がよかったので、レベルの高い高校に入ったが、成績は赤点のオンパレード。それでも何とか大学に進学。卒業後は、契約社員を経て正社員として働いたが会社が廃業。

### 耳が聞こえなくなり退職して実家にひきこもる

再び正社員として就職できたものの、30代前半ころから少しずつ耳の聞こえが悪くなってきて、仕事に支障が出るようになり退職。その後仕事を探すが、難聴をどうしていいのか分からずに就職活動をやめた。親からは仕事をするように言われ口論になった。

外には出ていたが人に会うのが怖くなったが。耳や音に執着があったのか無理にボリュームを上げて音楽を聴いていると、不安で体が震えることがあった。2年くらいは極力人に会わずに過ごした。

### 相談から精神科・障害福祉サービス事業所につながる

県の福祉総合相談センターに今後の生活について相談に行った。アドバイスを受けて身体障害手帳を取得し、うつの徴候もあったことから精神科を受診。精神科のデイケアへ通っている頃は人生を悲観して「死のうかな」と思ったこともある。その後、知り合いから障害福祉サービス事業所の話聞き、病院にあったパンフレットを読んでもみると興味がわいた。見学し、通所してみると聴覚障がいがあっても親身になって就労の相談に乗ってくれるところがあることが分かり気持ちが軽くなった。

### 不安はあるけど…

手話の勉強を始めて、こんなに助けてくれる人達がいるんだと感じた。今は「おいで、おいで」と言ってくれる人がいるから、死ぬのはもったいないと思える。対人不安は段々と良くなっている。

聴覚障がいは一見してわかりにくい障がいだけに就職には不安がある。例えば、初めに障がいのことを伝えておけば、ゆっくり話したり、大きい声で話したりしてもらえるが、職場でそれをやってもらえるか、理解してもらえるか不安がある。仕事はまだ不安だが、何か身につけてからやりたい。なるべく聴力が必要ない仕事を探したい。

## 事例2：不登校からひきこもりに

### おとなしい性格、友人が少ない（幼少期～高校卒業）

おとなしい性格で、子どもの頃から友人は少なかった。小学校時代は、放課後に友達と遊ぶこともなく自宅でTVを見て過ごすことが多かった。学校にあまりなじみず高学年になると欠席しがちになった。中学校に入学しても状況は変わらず保健室でほとんどを過ごした。

高校へ入学したが、休みがちになり2年生で退学。その後、2年ほど家で過ごしていたが、資格を取得しようと19歳で通信制高校に入学し、21歳で無事に卒業した。

### 高校卒業後ひきこもる（高校卒業後～ひきこもり期）

在学中には就職活動をしなかったため、卒業後は自宅でTVやインターネットをして毎日を過ごす。外に出たい気持ちと家に居たい気持ちの間で揺れ動き、どうしたらよいか分からず、ほとんど外出せず6年間ひきこもった。近所の人目が気になり、後ろめたく、家族にも申し訳ない気持ちだった。

### インターネットで自分の状態を相談（動き始め～発達障がいの診断）

20代後半、自らインターネットのチャットなどで自分の状態を相談し、精神保健福祉センターに相談したほうがよいとアドバイスをもらう。30歳を目前に自分でも状況を変えたいという気持ちがあり、相談に行ったところ、メンタルクリニックの受診を勧められ、診察の結果「発達障がい」と診断された。

### 障害福祉サービスによる就労支援

主治医の勧めで障害者手帳を取得し、障害福祉サービスで就労支援を受けることを決意。地域にある障がい者の就労支援事業所を紹介されて見学に行くと、自分と同じような悩みがある人が通っていた。「ここなら自分もがんばれる」と感じ、2年間通う中で、働くことに対するイメージが変化。「失敗したら怒られる」というイメージから「自分でも仕事ができるんだ」「楽しいな」という気持ちに変わった。

### 一般就労へ

一般企業での実習を終了し、人や社会に対する恐怖心が和らぎ、働きたい気持ちが高まった。就労支援事業所の紹介により無事にパートスタッフとして一般企業で働くことができた。